

主において常に喜べ。重ねて言う、喜べ。主は近づいておられる。

(待降節第三主日のミサの入祭唱)

待降節が巡ってきました。教会暦の新年にあたり 主の降誕を待ち望む、希望と喜びの季節です。

「常に喜びなさい」とありますが、本当にそんなことが出来るのでしょうか？ 嬉しい時、生活や仕事が順調にいつている時、長い間の努力が実った時などには、喜べるでしょう。が、「常に」となると、悲しい時にも、物事が思い通りにいかないときにも、長年の努力が水泡に帰してしまったようなときにも、喜べというのでしょうか？ 世の中には、悲しんでいる人、苦しんでいる人、いつそのこと死んでしまおうかと考えている人もいるというのに、自分だけ喜んでいてもよいのでしょうか？ 現代の日本も世界も「喜び」が希薄になってしまったようにも見えます。

この言葉をフィリッピの信徒に書き送ったとき、パウロは牢獄につながれていました。自由を奪われ、非人間的な、寒く、不潔な環境の中で、およそ喜びからかけ離れた状態にしながら、何故パウロは 喜びと愛に満ちた書簡を書くことが出来たのでしょうか？

パウロが、苦しみのさ中にあっても、何物も奪うことが出来ない深い喜びを見い出すことが出来たのは、「主において」であり、「主が近づいておられる」からでした。私たちに、うわべだけの楽しみではなく、心を満たす真の喜びを与える「救い主」が、幼子の姿でひっそりと近づいてこられます。見逃すことのないように、「目を覚まして」待ちましよう。

塩谷 惠策 SJ